『歎異抄』のおはなし㉓第十五条（1）
この世でさとりを開くという異義

今日から第十五条に入ります。

◎今回のお話：この世でさとりを開くという異義への批判

浄土真宗では、信心を得て念仏する人は、「正定聚不退転」という、必ずさとりを開いて仏になることが定まった位に至るといわれますが、このことを、この世でさとりを開いて仏になることだと主張する人がいたそうです。
親鸞聖人はお手紙や和讃等の中で、「信心の人は如来と等し」「弥勒と同じである」などと書かれています。

（親鸞聖人作『浄土和讃』より）
「信心よろこぶそのひとを　如来とひとしとときたまふ
大信心は仏性なり　仏性すなはち如来なり」

「仏性」とは、仏となるべき可能性で、浄土真宗では、如来から賜った信心のことをいいます。
信心は、自分の力で起こすものではなく、如来の本願がわが身に及んで、おのずから自然に起こるものです。

（現代語訳）
〈信心を得て喜ぶ人のことを、如来と等しいと説かれています。大いなる信心は仏性であり、仏性はすなわち如来と等しいのです。〉

ここから誤解が生じたようです。等しいとはいえ、さとりを開いた如来そのものではないのです。
第十五条では、この誤解に対する批判と、「即身成仏」という、この世でこの身のまま悟りを開くという教えに対する批判が展開されます。
そして浄土真宗における真のさとりとは何かを、自力聖道門のさとりと比較しながら、詳しく述べています。

浄土真宗では、この世でこの身のままさとりを開くという「即身成仏」ということは言いません。私たちが煩悩をたくさん備えたこの身のままで、この世で仏になることはありえないというのが、浄土真宗の教えです。

◎煩悩具足の身でさとりを開くなど、とんでもない！

「煩悩具足（ぼんのうぐそく）の身をもて、すでにさとりをひらくということ、この条、もてのほかのことにさふらふ。」

「煩悩」とは、正しく物事を見ることを妨げ、私たちを煩（わずら）わせ悩ませるもののことです。親鸞聖人が書かれた『唯信鈔文意』には、「煩は身をわずらわす、悩はこころをなやます」と書いてあります。貪欲（とんよく）（むさぼり）・瞋恚（しんに）（怒り）・愚痴（ぐち）（愚かさ）を三毒の煩悩といいます。
「具足」は、身にそなえていることです。
「もてのほかのこと」というのは、思いもよらないこと、という意味で、「もて」は「もって」のことです。

（現代語訳）
〈あらゆる煩悩をたくさんそなえた身でありながら、この世でさとりを開くということについて。このことはもってのほか、とんでもないことです。〉

煩悩を滅してこその「さとり」ですから、煩悩を備えたままで仏になることはありえません。

◎「即身成仏」と「六根清浄」

「即身成仏（そくしんじょうぶつ）は真言秘教（しんごんひきょう）の本意（ほんい）、三密行業（さんみつぎょうごう）の証果（しょうか）なり。」

「即身成仏」とは、この身このままで仏になることです。
「真言秘教」は、弘法大師空海（こうぼうだいしくうかい）が平安時代に開いた真言宗の教えで、大日如来（だいにちにょらい）から秘密に伝えられたとされます。「真言密教」ともいいます。
「三密行業」というのは、真言宗の密教の修行法で、「三密」とは身密（しんみつ）・口密（くみつ）・意密（いみつ）のことです。これは手に印契（いんげい）を結び、口に真言（マントラ）を称え、心に本尊の大日如来を思い描いて精神統一することをいいます。この衆生の三密の行と大日如来の身口意（しんくい）の三業が一体になり、この身のまま

で仏の境地に達する「即身成仏」が達成されるといわれます。
「即身成仏」と「即身仏」とは異なるもので、即身成仏とは生きている生身の体と心のままさとりを開いて仏になることですが、「即身仏」とは、修行の末に命を絶ち、ミイラ化した僧侶の遺体のことをいいます。
「証果」とは、成仏の結果を証明することで、修行の結果のさとりのことです。

（現代語訳）
〈この身のままこの世で仏になるというのは、弘法大師空海が伝えた真言密教の根本の教えであり、身と口と意（心）の三つにさまざまな修行を積んだ結果、得られるさとりです。〉

「六根清浄はまた法華一乗の所説、四安楽の行の感徳なり。」

「六根清浄」というのは、眼・耳・鼻・舌・身の五つの感覚器官と意（心）の六根の穢れをはらって清らかになると、さとりの境地になるという修行のことです。修験道の行者などが、「懺悔懺悔、六根清浄」と唱えながら歩くことで、心身の穢れを祓い、無事を祈る掛け声として知られています。
「法華一乗の所説」は、伝教大師最澄がやはり平安時代に開いた天台宗の『法華経』の説く教えで、声聞乗（仏の教えを聞いてさとりをめざす者）・縁覚乗（仏の教えによらず自らさとりを開く者）・菩薩乗（すべての人々を救済しようと利他の精神を発揮する者）の三乗に対して、それぞれ別々に説かれるものが根本では一つであると説かれます。「一乗」の「一」は唯一無二、「乗」はさとりに達するための乗り物・教えのことです。すべてのものをこの乗り物に乗せて等しく仏にするという教えのことをいいます。
「四安楽の行」とは、心身を安楽にさせるための四つの修行法で、身（肉体的行動）・口（言語表現）・意（行動への意志）の三つの行為についてあやまちを犯さないようにする安楽行（身安楽行・口安楽行・意安楽行）と、世の人びとをさとりに導く慈悲行である誓願安楽行の四種類があります。「六根清浄」は、この四安楽行によって得られるとされます。
「感徳」は、修行の結果として身に受ける功徳のことで、深遠な真理をさとることです。

（現代語訳）
〈また身心のすべてを清らかに保つ六根清浄というのは、伝教大師最澄が伝えた天台宗の法華経が説く教えであり、身体と口と心とを安楽にして、善行と慈悲行という四安楽の行を修め

て得られる功徳です。〉

親鸞聖人も蓮如上人も、このような自力の教えを実は決して否定はしておらず、これらはお釈迦様が説かれたことでもあります。
ですから、自分の心身の穢(けが)れを除いて、誤った心を捨てて正しい心となり、煩悩をなくしてゆけば、さとりに達するのであって、お釈迦様が説かれた通りでしょう。
しかしながら、これは大変厳しく難しい修行です。
心も賢く意志も強く、理解する智慧もすぐれていて、能力のある人でなければできないことです。
自分にそのような能力や資質があるか、深く自省しなくてはなりません。
親鸞聖人は、お若い頃に比叡山で厳しい修行をされていましたが、さとりを得られず、山を下りて法然上人のもとで浄土門の教えに出逢われました。そしてご自身の内面を見つめられて、深い懺悔の言葉を著書の『教行信証』他で述べられています。

◎能力のすぐれた人だけが修められる厳しく難しい修行

「これみな難行上根(なんぎょうじょうこん)のつとめ、観念成就(かんねんじょうじゅ)のさとりなり。」

「難行上根のつとめ」というのは、難行道(なんぎょうどう)（自力聖道門(じりきしょうどうもん)）の困難な修行をする、能力のすぐれた人だけが成し遂げられる、厳しく難しい修行のことです。「難行道」（自力聖道門）というのは、自分自身の厳しい修行の力（自力）によってこの世で煩悩を断ち切り、さとりを開いて仏になろうとする険しい道のことです。
「観念成就」は、瞑想(めいそう)によって仏や浄土をイメージすることで、「観念」は、観察(かんざつ)の「観」と思念の「念」であり、妄念を払って心を静め、真理を観察し、体得することによって成就するさとりです。

（現代語訳）
〈これらはすべて、たいへん難しい修行の道であり、能力のすぐれた人だけが修めることができる教えであり、精神統一して仏教の真理を観想することによって得られるさとりです。〉

鎌倉時代以前の平安時代に成立したこの二宗は、自力聖道門の代表選手ともいえるでしょう。
この二つの宗派は、街中のごみごみしたところを離れて、清浄な環境を求めて山岳仏教を中心としたものであり、煩悩渦巻く社会を離れたところに、修行や学問の本拠を定めたのです。

真言宗では高野山、天台宗では比叡山の山にこもって、厳しい修行を重ねました。

◎次の世でさとりを開くという易しい教え

「来生の開覚は、他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。」

「来生の開覚」とは、次の世、来世に浄土でさとりを開き仏になることです。
「他力浄土の宗旨」は、他力教すなわち浄土教の本義のことです。
「信心決定の道」というのは、信心決定の道理のことです。「道」は要道すなわち大切な方法や教えのことです。

（現代語訳）
〈これに対して、次の世でさとりを開くというのが他力浄土門の教えであり、阿弥陀如来の救いを信じる心が定まったときに間違いなく与えられる、本願の働きなのです。〉

凡夫のための教えである他力浄土門は、来世において浄土に生まれて悟りを開くという教えであり、能力の劣る人にとって実践可能な唯一の教えであると、唯円房は言います。

「これまた易行下根のつとめ、不簡善悪の法なり。」

「易行下根のつとめ」とは、能力の劣った煩悩具足の凡夫が修する易しい行のことです。「易行下根」は、前に出てきた「難行上根」に対する言葉です。
「不簡善悪」というのは、弥陀の本願は善悪の人をえらばず、という意味で、善悪をより分けて選ばないこと、善人と悪人を区別しないことです。

（現代語訳）
〈次の世に浄土でさとりを開くことは、易行の易しい道であり、能力の劣った人でも実践できる修めやすい教えであり、善人も悪人もわけへだてなく救われていく教えです。〉

◎高僧でもやはり来世でさとりを開くことを祈る

「おほよそ今生においては、煩悩悪障を断ぜんこと、きはめてありがたきあひだ、真言法華を行ずる浄侶、なをもて順次生のさとりをいのる。」

「真言法華」は真言宗と天台宗のことです。平安時代や鎌倉時代に「法華宗」といえば「天台法華宗」すなわち天台宗のことで、日蓮宗のことではありません。
「浄侶」というのは、聖道門の徳の高い立派な僧侶を意味します。
「順次生」とは、今生の次に受ける生のことです。

（現代語訳）
〈およそ、この世で煩悩を断ち罪悪を滅することは、きわめて難しいので、真言密教や天台宗の法華経の行を実践する徳の高い僧侶であっても、やはり来世でさとりを開くことを祈るのです。〉

この現世で煩悩を取り除き悪障を断ち切って、仏になるということは、ほとんどあり得ないことです。
ですから、真言宗や天台宗の厳しい修行に励んで清浄な生き方をしている高僧たちでさえ、「即身成仏」や「六根清浄」と言いながらも、この世でこの身のままさとることができないので、いざとなると、晩年の最後には、次の世に弥陀の浄土へ往生してさとりを開きたいと祈っています。
どんな聖者であっても、人間が今生でさとりを開くことは容易ではなく、煩悩を断つことは、きわめて難しいのです。

あの、チベット仏教の最高位であるダライ・ラマ 14 世でも、怒ることはあるそうです。
しかしダライ・ラマの場合、心の表面は波立っても、深いところは静かで穏やかなのだといいます。
そして怒りを心の中に留め置かない訓練をしているので、怒りを引きずることはないそうです。

◎弥陀の本願という船で迷いの海を渡ってさとることができる

「いかにいはんや、戒行恵解ともになしといへども、弥陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩悩の黒雲はやくはれ、法性の覚月すみやかにあらはれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにてはさふらへ。」

「いかにいはんや」は、どうして～といえるか、いえない、という意味です。
「戒行恵解」というのは、戒律を守る修行と、さとりの智慧によって仏法を理解することです。
「願船」とは、すべての者を漏らさず救うという阿弥陀仏の本願を船にたとえたものです。
「生死の苦海」は、迷いの世界を海にたとえたものです。
「報土のきし」とは、真実の浄土という岸のことです。「報土」は「真実報土」の略で、浄土のことをいいます。
「黒雲」というのは、煩悩のたとえです。
「法性の覚月」の「法性」はさとりの世界（真如）のことで、これを月にたとえたものが「覚月」です。前句の「煩悩の黒雲」を受けて、さとりを清く澄み切った月にたとえたものです。
「尽十方の無碍の光明」とは、十方の世界をことごとく照らして何ものにも妨げられない光明のことで、阿弥陀仏の智慧を光明にたとえたものです。
十方とは、東西南北の四方に東北、東南、西南、西北の四つを加えて八方としたものに、上方と下方の二方を加えて、合計で十方としたもので、これはありとあらゆる方角、という意味になります。
阿弥陀仏のことを、「尽十方無碍光如来」とも言います。お仏壇にも、御本尊の阿弥陀像の右側に大抵、「帰命尽十方無碍光如来」と書かれた掛け軸が掛けられています。
「一味にして」というのは、一体となって、という意味であり、まったく等しいことです。
「一切の衆生を利益せん」とは、さとりを得た結果として、一切の衆生をさとりに導こうとする活動のことです。

（現代語訳）

〈まして、戒律を守って厳しい修行をすることもできず、教えを理解してさとりを開く智恵もない私たちが、この世でさとりを開くことなど、できるはずもありません。しかし、そのような私たちであっても、阿弥陀仏の本願という船に乗って、苦しみに満ちた迷いの海を渡り、極楽浄土の岸にたどり着いたなら、煩悩という黒い雲はたちまちに晴れ、さとりの月が速やかに現れて、何ものにもさまたげられることなく、あらゆる世界を照らす阿弥陀仏の光とひとつになり、すべての人々を救うことができるのです。そのときにはじめて、さとりを開いたというのです。〉

戒律も守れず、智慧もない私たち凡夫が、この世においてさとりを開くなどというのは、ほとんど不可能といっていいでしょう。
ところが、ありがたいことに、こうした凡夫を救おうとお誓いくださった阿弥陀仏の本願があります。
本願とは、阿弥陀仏の救いを信じて念仏するすべての人を漏らさず必ず救うという、阿弥陀仏のお

誓いのことです。
この本願の船に乗せられて、迷いの生死を繰り返す苦しい海を渡り、彼岸の浄土に着いたなら、たちまち煩悩の黒い雲が晴れ、法性をさとった月が現われ、浄土に往生すると、すぐさま弥陀と同じさとりを開くことができるのです。

◎本願の船に乗るのは今！

真宗の教えは、この世では信心を得て正定聚に入る利益を得て、来世で成仏してさとりを開くというものです。
しかし、他の自力聖道門の教えでは、「即身成仏」や「六根清浄」など、今生でさとりを開くことを説くために、真宗でも今生でさとりを開いて仏になるという誤った考えが起こったのです。
それを正そうとしたのが、この第十五条です。
人々はともすると、浄土真宗の「来生の開覚」すなわち次の世でさとりを開くという教えでは待ちきれず、今ここでさとりを開かなければつまらない、と思いがちであり、自分が生きている間に無上の幸せが実現するのでなくては面白くないと、せっかちな考えをしがちです。
ところが、この世で生きている間にさとりを開くことは、至難の業なのです。

しかし、如来の本願の船に乗れば、生死の苦海を渡り、必ず未来において、さとりの岸に送り届けていただけるのです。
本願を信じて船に乗るのは今であり、今生のことなのです。

次回は令和 9 年 3 月 21 日（日）・(春分の日）の春季彼岸法要で、今日の続きの第十五条（２）を拝読したいと思います。

ご清聴ありがとうございました。